追悼

竹村卓二（たけむらたくじ）名誉教授

2008年1月28日死去　77歳

塚田 誠之（つかだ しげゆき）

本館先端人類科学研究部

呼び出されて先生の研究室へ伺うと、「塚田君、ここだけの話なんだが・・・」。ここだけ、といいながら部屋のドアを開放した状態でそこら中に聞こえる大音声・・・。とにかく気宇壮大で豪快である。他方で、他者に対して細やかで行き届いた配慮をされる人だった。研究会に招いた学者に対して礼を尽くして接するのはもちろん、他人のために進んで一肌脱ぐのを好み、ときには結婚の仲立ちまでされたという。このような先生の個性は接する者を魅了し、人びとの結集の中心であり続けた。かつて民博の先生たちのなかには少々変わった人もいたようだが、先生は紛れもなく民博の名物教授の一人であった。

かつて民博に民族学および関連分野の専攻の大学院生に対して研究指導をおこなう「受託学生制度」があった。歴史学を研究していた筆者は一九八三年、文化人類学の方法論を取り入れて新しい歴史学を構築しようと思い立ち、民博宛に鉄道荷物で布団袋を送り、北海道から駆けつけた。筆者は当時、不遜にも、院生の研究成果の発表は教員とのサシの勝負の場だと思っていたので、先生をつかまえて何度か研究報告をおこなった。そのころ、先生は公務多忙を極めており、さぞかしお疲れであっただろうが、熱心に話を聞いてくれて適切なアドバイスをしていただいた。筆者が民博を去るときには、「さやかですまんが」と言いながら新任の久保正敏助手の歓迎会を兼ねた送別会までしていただいた。親分肌で義理堅いのである。この一九八三年の記憶は昨日のことのように心奥に留まり続けている。

竹村先生の数多い業績のうち、日本の文化人類学の研究史上特筆されるのは一九八一年に刊行された『ヤオ族の歴史と文化――華南・東南アジア山地民族の社会人類学的研究』（弘文堂）である。中国の浙江・湖南・広東・広西・雲南、さらには東南アジア大陸部諸国の広大な地域を舞台に、長期にわたり移住・分散していった山地民ヤオ族が、いかにして漢族をはじめとする平地民との「社会的共生」を実現・維持し、民族アイデンティティを保持しえたかという問題を中心的テーマとし、実証的に論じたものである。ヤオ族の適応のメカニズムを、適応に成功した移動性のつよい「過山」型ヤオ族と、適応に成功せずに深山に逼塞（ひっそく）する命運をたどった非過山型のヤオ族との比較検討を通じて、文化や社会組織の諸側面から、文献と実地調査による研究とを併用する歴史民族学的方法を駆使して鮮明に描き出した。この先生の渾身の大作は洛陽の紙価を高めた。現在でも研究者にとって必読の文献となっており、また中国でも翻訳され国際学界で広く知られている。

先生は研究会の組織者としても活躍された。白鳥芳郎先生・君島久子先生らとともに「中国大陸古文化研究会」の運営をされ、民博でも先生が中心となって、はじめて中国南部の漢族や少数民族を対象とした共同研究が着手された。先生の足跡を追懐するとき、鳥居龍蔵博士から始まった中国南部の諸民族の民族学的研究を大きく発展させて、今日の隆盛の礎を築いた功績がきわめて大きいことをあらためて深く認識させられるのである。

先生から賜った深い学恩に衷心より深謝し、謹んでご冥福を祈りたい。

1988年11月、香港中文大学で撮影。前列左から謝剣、喬健、中根千枝、費孝通、竹村先生、同夫人の順。故・費孝通教授と一緒に写っている写真として貴重だ

江口一久（えぐち かずひさ）名誉教授

2008年6月13日死去　66歳

庄司 博史（しょうじ ひろし）

本館民族社会研究部

六月一三日、民博名誉教授の江口一久さんが逝ってしまった。不慮の事故だったが、江口さんが好んでいつも語っていた昔話の主人公のように、ちょっと江口さんらしく、あっけない旅立ちだった。

江口さんは開館から、数年前の定年退職まで三〇年近く勤めたあとも、しばしば館の行事に参加し、研究や資料整理でも民博を訪れた。必ず友人の研究室や院生室をまわって話し込んだ。彼ほど民博を愛し、人とのコミュニケーションを楽しんだ人はいない。

おおらかな性格は時折彼のわけ隔てせず遠慮のないことば使いにもあらわれたが、その魅力に惹かれ人が集まった。根っからの人好きであった。

それをいちばん感じたのは、二〇〇三年開催の特別展「西アフリカ　おはなし村」の実行委員長を務めたときである。広い展示場は、彼の調査地、カメルーンのマルア村の家屋をいくつか再現し、食器や衣類など日常生活品があるほかは、空間であふれていた。江口さんはこれを語り部とドラムのパフォーマンス、そして来館者のノリで埋めようとしたのである。彼特有の奇抜な計画に周囲は驚いたが、特別展の一年数ヵ月前に集まった一〇〇名近いボランティアと彼自身の語りのパフォーマンスで、特別展の四ヵ月は余韻を残しながらあっという間に過ぎた。特別展の終了とともに、小さな西アフリカの村は消えたが、展示をささえた語り部のグループは「地球おはなし村　おはなし畑」、ドラムのグループは「音楽畑」として残った。江口さんを村長として頂く「地球おはなし村」は現在も各地でイベントや福祉施設などで活動を続けている。神戸聖ミカエル大聖堂での江口さんの通夜と葬送で「地球おはなし村」の人びとが見せてくれたパワーに江口さんの遺志を感じなかった人はいないだろう。

特別展開催中、連日来館者に昔話を語る江口先生
（提供：千里文化財団）

江口さんの特別展のベースになったのは、ライフワークでもあったカメルーンのフルベ族の昔話であった。三〇年間彼が毎年数ヵ月すごしたマルア村で収集した数千時間にもおよぶ昔話を文字化し、翻訳し出版するのが、近年の日課であった。一部はすでに分厚い五巻の『北部カメルーン・フルベ族の民間説話集』として刊行されている。しかし、増え続ける収集データに毎日数時間の文字化作業もおいつかず、退職後の多忙をうれしそうに嘆いていたのが思い出される。特に近年は、五〇〇話を語っても、まだ話の尽きそうもないドゥルンガスおばさんが、彼にとって話の宝庫であったようだ。敬（うやま）いを込め親しげに彼女のことを語る江口さんが印象的であった。

とにかく江口さんはことばがすきで、語学的才能は伝説であった。彼が、幾つことばができるのか周囲では諸説が飛び交っていた。わたしに尋ねられたことも一度や二度ではない。ことばの果てしなさをしる言語学者は、軽々しく幾つの言語ができるとは言わないものだが、じつはわたしも何度か聞きたく思ったほどだ。彼の研究や信仰とかかわる言語はともかく、「え、このことばも？」と驚かされたことはしばしばあった。アラビア語、ベトナム語、中国語・・・、いや、やめておいた方がよさそうだ。とても紙幅が足りそうにない。

英語に日常接しながら、英語の権威性を批判していた江口さんは、学生時代からのエスペランチストでもあった。同じ立場を共有し、それをネタに酒をのめたことに今も感謝している。

研究者としてフルベの昔話の収集に半生をささげ、また語り部としてそれを人びとに語り続けてきた江口さん。そして、亡くなってしまった今、今度は自分が昔話の主人公となって、フルベの村で語り継がれていくだろう。「ターレル、ターレル・・・（さあ、お話をはじめよう）」と。